

## 痕と明日

子供のころに不思議だったこと。二十三時くらいに、「あと一時間で明日だ」と思っているのに、一時間後にやってくるのは明日ではなくて今日だということ。待ち焦がれた明日は、二十四時間後という、遙か彼方へと行ってしまうこと。今日は昨日になって、明日は今日になって、明日は掴めなくて……。そんなことを思い出した。

さびれた駅のホームに立っているのは、私と彼の二人だけだった。冷たい風が吹いた。私の頬を切り裂こうとしているような、そんな冷たい風だった。

私は視線を落として、プラットホームに引かれた白い線を見つめた。線の向こう側とこちら側。私は向こう側で、彼はこちら側。私は彼の隣に立っている。だけど、私はこちら側にいてはいけなくて、向こう側にいなければいけない人間なのだ。

「私もこっちにいたいんだけど」

そう呟いた。

「だめだよ」

彼がそう言った。

私は彼の方に顔を向けた。彼は私の方を見てはいなかった。

「どうして？」

「どうしても」

「どうしてもなの？」

「どうしてもだよ」

「ねえこっち見てよ」

私がそう言うと、彼は私の方にゆっくりと顔を向けた。私は彼の目を見た。彼も私の目を見た。彼と目が合っているはずなのに、私が見ているのは彼の目のはずなのに、私には彼がそこにいないような気がした。それはたぶん気のせいではない。

「ねえ、あなたはどこにいるの？」

ここにいるよ。

私はそう言ってほしかったのに、彼は黙っていた。ただ、困ったように笑っているだけだった。

電車はいつ来るのかわからなかった。どこに向かう電車なのかさえわからなかった。そもそも、私はどこへ向かいたいのかもわからなかった。いや、行くべき場所はある。行きたいところもある。でもそこは、行きたくはない場所で、行ってはいけなくところなのだ。頭ではわかっている。

「ユキ」

彼が私の名前を呼んだ。

「泣かないでよ」

いつの間にか私は泣いていたらしい。いつもだったら彼はすぐにもハンカチを取り出し、そっと私に渡してくれるのに、今の彼はやっぱり困り顔で笑っているだけだった。

「ハンカチ貸して」

私はそう言った。彼へのいじわるだった。言った後に自分の性格の悪さを少し後悔した。

「ごめんね」

彼は私から顔を背けた。

「今日は持っていないんだ」

私は知っている。彼は外出するときにハンカチを忘れることなんかない。今だって彼のズボンのポケットにはハンカチが入っているに違いないのだ。

今日は、という彼の言葉が淋しかった。

「そういえばさ」

私は指で涙を拭った。

「私たちが出会ったきっかけもハンカチだったね」

私も彼の方から目を背けて言った。

「君が落としたハンカチを」

「あなたが拾った」

そう、彼と出会ったきっかけは私が落としたハンカチで、それは別れるきっかけで。

「ねえ」

「何？」

「運命って信じる？」

「あなたは？」

「僕は」

遠くから電車が近づいてくる音が聞こえる。

「僕は信じてる。君と巡り合ったことも運命だと思う。そして今、君と別れなくちゃいけないことも」

まっすぐにのびる線路の先の方に電車が小さく見える。

「ねえ」

「ん？」

私が呼ぶと彼はこっちを向いた。

「嫌、なんだけど」

「何が？」

「別れるの」

「そっか」

電車はどんどん近づいてくる。

「今なら間に合うね」

私は泣きそうになるのを必死に堪えて、なんとかして笑おうとしながら、彼にそう言った。きつと、とても醜い顔だったと思う。とてもとても醜い顔だったと思う。

「一緒に行く？」

彼はそう私に聞いた。それは、とても醜い顔だった。醜くて、とても愛おしい顔だった。

「でもね」

彼の目は濡れていた。

「僕にはもう明日は来ないけど、君には明日が来るんだから」

風に飛ばされた私のハンカチを追いかけた彼はもう戻らない。そう、わかっていたのだ。わかりたくないだけなのだ。

「ユキ、目を閉じて」

私は目を閉じた。瞼の裏にはいろんな彼がいた。彼の唇が触れた

気がした。それはたぶん気のせいだろう。

私は目を開けた。彼はそこにいた。いないけどいた。

電車がホームに入ってきた。電車の扉が開く。

「さあ、電車に乗って。ユキ、お別れだよ」

私は彼のその言葉にあらがうことは出来ず、電車に乗り込んだ。

電車とホームとの隙間、小さい子の足が挟まってしまいかしまわないかといった、そんな小さな隙間が私と彼の間を隔てた。それが、私と彼の差。私と彼の違い。一緒にいられない理由。

「私は怖い」

「何が？」

「あなたが消えてしまうことが」

「それじゃあさ」

彼はもう泣いていなかった。本当は最初から泣いていなかったのかもしれない。私が、彼に泣いてほしかっただけかもしれない。

「僕がいた痕を君に残すよ」

言葉はナイフだ。そう彼は言った。

「ユキ」

彼はにこつと笑った。

「大好きだよ」

ピーという発車の合図の後、電車の扉が閉まった。

電車が走りだす。彼がどんどん小さくなっていく。彼は笑っているような、それでいて泣いているような、そんな顔で私の方をずっと見ていた。彼の唇が動いて、私に何か伝えようとしているのがわ

かった。私が、そして彼が旅立つために、二人の今を過去に変えるために、彼が胸の内に隠していた思いが、彼の唇から溢れていた。

彼の姿が見えなくなってしまった時、私はその場にうずくまった。涙が溢れてきた。

私の頬には、一筋の赤い線が入っていた。そこから流れ出した血は頬から顎へと流れ、それは私の涙と混じり、ぼとりと電車の床に落ちた。一粒、二粒、三粒。

こんなにも誰かを好きになる日が来るなんて思っていなかったのだ。それが、頬の傷になった。

この傷もいつかは治ってしまうかもしれない。頬からは痛みがなくなり、傷跡もなくなるかもしれない。それでも、私は痛かったことを覚えていられるだろう。涙と血が混ざった、この色を忘れないだろう。

電車のアナウンスが行先を告げる。いつ到着するかわからないその行先は確かに私の前にある。掴めるかわからないけど、それでも先へ進まなければならない。

彼に言えなかった言葉を私は抱いたままで、さよならという一言を私は抱いたままで、そんな私を優しく抱いて、電車はいつまでも走り続けるのだ。